

◇新春というけれど、ちっとも春らしくないお正月です。これは昔の人がやせ我慢していたわけではなくて、ご存じのとおり暦のトリックです。平成二十六年の大晦日は、旧暦では十一月十日です。ということとは旧暦の元旦は、今のこよみでいえば、二月十九日。それならば、梅も咲いて新春です。◇英語で春は spring。よく言われることです。が、もとの意味は、飛び跳ねておどる事。それにならって今年の春は少しばかり、はねておどってみようかと思えます。何分、体重がおもいので、高くは飛ばせんし、スマートにはおどれません。◇

◇ひとつは別紙で募集しているように、「電力の鬼、松永安左衛門を追っかけて」のバスハイク。ふたつは三月十五日の彼岸法要とミニコンサート。春秋彼岸法要の後に、住職の法話ばかりではなくて、落語をやったり音楽をやったりといろいろなことを始めたのは平成十八年です。それから十年。「いつかは」と思っていたゲストを迎えます。ヴァイオリニストの天満敦子さんです。呼ぶぞーと決心して覚悟したのが旧年の十月。超多忙の方をお呼びするには、遅すぎます。でも、

編集後記

彼岸入り前の日曜日になんか滑り込むことができず。例年の春の彼岸のご案内は三月初旬にお届けしますが、今回は二月中旬に郵送します。◇彼岸法要と関連させないで、コンサートだけをやる方法も考えたのですが、それでは、来る人が限られてしまう。天満さんのヴァイオリンコンサートなんかへは決して行かない人にも、お寺の本堂で聞いたもらいたいから、こんな日程になりました。◇三月十五日では温暖化といっても、桜のつぼみはまだ固いでしょう。桜といえは正統時代には松岩寺門前には名勝に指定された桜堤があったといわれています。その遺構は熊谷駅南東の万平公園にあります。今からは想像もできないのどかな場所だったのでしよう。昔のことだから桜堤があれば、料亭もある。料亭は残念ながら、閉店してしまっただけで、寺から三分ほど歩いた八木橋デパート駐車場隣に「アプラランティ」という小粋なフランス料理店があります。ご法事の後の食事にも使えます。電話は048(521)1620。チェーン店ばかりのファミレスに、負けずにがんばっています。

新しい年は、ひつじ年だといっています。でも、身近に羊はいません。過ぎた一年間で実際に羊を目にしたことはないし、今年も出会う予定はありません。日本の和歌や古典にも登場することが少ないといえます。「メリーさんのひつじ」なんて童謡もあるけれど、あれはアメリカ生まれ。最近の日本の童謡では、「やぎさんゆうびん」というのがあり。みつけた。くろやぎさんたらよまみつけた。くろやぎさんたらよまみつけた。でもあれは「やぎ」の歌です。愚問を発してしまっけれど、「羊」と「山羊(やぎ)」はどう違うの？。よくよく考えてみれば、日本人にとっては、馴染みの薄い動物なのかもしれません。日本では親しみがなく、十数年前にスペインのキリスト教巡礼地へ行った時、禅の修行僧姿で巡礼路に放牧された羊のフンを、ワラジで踏みながら歩いたのは忘れられません。



キリスト教の聖書には「羊飼いや」「小羊」といった言葉が頻りに出てきて、聖書を読み解くキーワードのひとつのよう。羊という言葉は経典にずいぶん登場してきます。禅の書物にも出てきます。中国・唐の時代の『臨濟録』には次のような一節があります。「羊は視力が弱くて、ものを見かける力がないから、鼻にふれたものは何でも口に呑みこんでしまう。同じように今どきのやからは外面が立派だとすべてを受け入れてしまう(如觸鼻羊)」

嘆かれようが叱られようが、視覚をはじめ味覚も嗅覚も、あちこちの感覚がだいたい衰えてきたので、クンクンと面白くて美味しくして役に立つものを求めて、どこへでも行って、何でもやってみなくてはと思う年頭です。

(住職記)

連続シリーズ「見つけた」

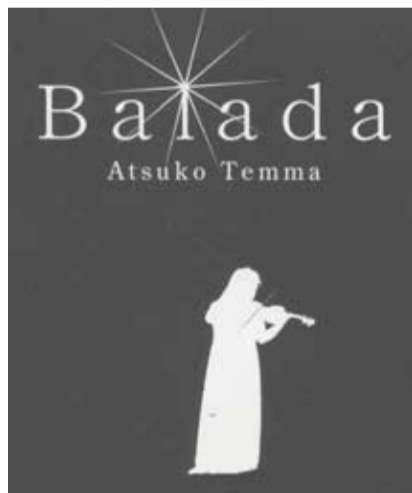
禅にこんな問答があります。原文は漢文ですが、現代語に超訳してみます。修行僧がお師匠さんに尋ねます。「道とは何ですか」「道か、その垣根の外にあるやないか」「そんなちっぽけな道ではありません。天下の大道を尋ねているんです」「大道か、それならば新幹線が通り、高速道路もあるじゃないか」



「大道長安に透る」という禅語の語源になっている問答です。つまり、仏教といっても、禅といっても、特別なものではなくて、日常生活の中にくらでもあるよ。といったところでしょうか。そこで、街頭に禅を探し、現代に仏教を見つけるコーナーをつくりました。

おもしろい本を見つけた！。一気に読んでしまいました。久しぶりです。一気に読ませてしまう面白い本が少ないのではなくて、集中力がないから読みおわらないだけで本には責任がありません。ずいぶん前だけど、佐藤健(1942〜2002)という著名な新聞記者に、「本なんて最初から最後まで読もうと思つたら一冊も読めやしない。ぱーっと読み散らかしていけばよいのですよ」と、言われたのをいいことに、読みかけの本ばかり。そんな私が一気に読了してしまっ

気者を呼ぶなんて無理！と思つて気がすまず、著書も読みかけでほっといたわけ。それから十数年。彼岸法要の後に落語やったり音楽をやったりして、楽しみに来てくれる人も増えて、そろそろ天満さんと呼んでも失礼にならないかなと思つて、満を持して三月十五日に予定がとれた。そこで、読んだのが『わが心の歌』というわけ。この本、〈望郷のバラード〉という曲との出会いをおして、天満さんのそれまでをふりかえっています。その曲との出会いが格好良すぎなんです。キーワードをあげれば、亡命・革命・ウィーンの外交官、それにヴァイオリニストが偶然で結びつく。まるで、小説みたい。だから、作家が前述の『百年の預言』を書いたので、ただし、「モデルは天満敦子で、行為は高樹のぶ子」とのこと。つまり、小説だから事実とは異なる部分も多い。詳しく書くには紙面が小さすぎるので、手もとにあるCDの解説の一節を引用します。



「人の運命を決めるのは〈巡り会い〉である。彼女は〈人〉と巡り会い、〈曲〉と巡り会った。そして、幸運を招き寄せた。しかし、この曲を広めたのは天満敦子その人であると言いたい」もちろん、三月十五日には松岩寺の本堂に、ストライヴアリアウスから、この曲が響きます。

『わが心の歌』が出版されたのは平成十二年。初版を買い求めて数ページ読んだだけで、それから長きにわたって本棚でほこりをかぶったままになっていました。どういふことかと白状すると、平成十年七月から一年間、朝日新聞に芥川賞作家・高樹のぶ子さんが『百年の預言』という小説を連載した。その主人公のモデルが天満敦子さん。天満敦子さんと面識がある義母から、「すごい人ね。お寺で天満さんに演奏してもらいなさい」と言われて参考資料に求めたけれど、クラシック音楽界では、「事件」ともいえるほど売れている人